

DALS ニュースレター No.10

東京大学

21世紀COEプログラム

生命の文化・価値をめぐる「死生学」の構築

Construction of Death and Life Studies concerning Culture and Value of Life

2005年7月1日

目次

巻頭エッセイ「執着を減することの死生学」

市川 裕

エッセイ「<死>のつくり方」

竹内 整一

書評 谷川健一著『神に追われて』(2000、新潮社)

嶋内 博愛

研究会・シンポジウム報告

公開シンポジウム「儒教における生と死」報告

小島 毅

杜維明教授随行記

小島 毅

アン・モンガヴァン氏講演研究会「命のギフトと命のリレー」報告

島園 進

Dr. Neal Krause 講演研究会

“Religion, Aging, and Health (宗教、エイジング、健康の関連)” 報告

金児恵・秋山弘子

今後の予定

シンポジウム「ケアと自己決定」

熊野 純彦

<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/shiseigaku>

執着を滅することの死生学

市川 裕

死生学を宗教との関わりで考えるとき、わたしの目下の関心は、原理主義や殉教の問題よりは、もっと人間一人一人の心に関係する事柄である。現世への執着をいかにしたら断つことができるのか、という宗教的問いである。これは、ことさら死生学と関係付ける必要はないかもしれない。しかし、あえて結び付けたい理由は、最近のわたしの日本文化趣味による。

ひところは、歌舞伎や文楽に出かけてみたが、最近には能に興味に向かっていく。もちろん、人に言うほど見たり学んだりしているわけではない。道元と世阿弥との関係とか、家康が大名の式学に定めたことが江戸の武士文化にどのような作用を及ぼしているのか、などといったことも、多少は気になる主題ではある。

数年前、ちょうどそういう関心が芽生えてきた頃、京都山科の醍醐寺にはじめて行った。3月だが、花見の季節になっていた。秀吉が作ったという三宝院の庭園をながめっていると、解説が流れて、これは能で用いた名だたる藤戸石3つを中央に配した池であるという。以来、まだ、能舞台で藤戸を見たことはない。しかし、気になって、そのあらすじを調べてみると、寂然としない内容であった。源平時代の話だが、あまりに武士に都合のよい結末ではあるし、口封じに殺された漁師と一人残された老婆が気の毒としか言いようのないものである。

しかし、漁師は身に受けた理不尽な仕打ちに恨み辛みをかたり、胸の内をさらけ出して現世への執着を語り尽くしたあと、仏法による弔いを受けることで、いとも簡単に成仏してしまう。「思はざるに、御弔ひの、御法の御船にのりをえて、即ち弘誓の舟に浮めば、水馴れ棹、さし引きてゆく程に、生死の海を渡りて願のままに、やすやすと、彼の岸に到り到りて、成仏得脱の身となりぬ、成仏の身とぞなりにける」と結ばれる。

それにしても、見方を変えれば、能は、人間の誰にでも起こるかもしれない恨み、妬み、執心、しがらみ、等々、現世への心の執着をいかに徹底して観察していることか、と感心する。芸術が執着を徹底的に表出することによって、カタルシスを与える効果を持つというべきか。思索の対象を提供することによって、各自が自己の執着と向き合うことを教えているというべきか。それはどうあれ、能の台本作者が、仏教的思惟と深く結びついていなければ出てこない着眼であると思う。

しかし、宗教はここからが問題である。いかにしたら、そうした執着を断つことができるのか。その救済の方法学という問題である。程度の差はあれ、世界の様々な宗教は、それぞれにこの問題と取り組んできたはずである。特に心のあり方をその教えの中心に据えてきた宗教的営為の典型は、やはり仏教であろう。苦集滅道という四諦の教説を立てて、執着を断つことが無とか滅とかいう手段によって達成されたあかつきに、初めて人間本来の精神活動たる道諦が、八正道として現れるということを説いた。

大衆レヴェルでは、出家者のように執着を断つことに専念することはできないから、執着を滅することは極めて難しい事はわかっている。そこで、この滅の方法論をめぐって、戒律、念仏、禅、題目などの理論が闘わされることになった。これらは易行、即ち、平易な方法論である。しかし、それは徹底を要求する。それは、私見によれば、執着を滅するのではなく、その方向を変えさせることである。執着とか恨み辛みとかいう感情は、強力な生のエネルギーをもっているから、方向付け、オリエンテーションを上手に与えてあげれば、著しい効果を発揮することになる。称名念仏や唱題のみを徹底的に繰り返すことは、心の集中を促す方法として理解することもできる。

いまは、こうした視点に立って、諸宗教がどのように、執着を滅する方法を考察し実践してきたかを調べている。同一宗教内においても、その理論と実践方法に従って、滅するのか方向転換

するのか、いろいろと分けて考えねばならない。しかもこれは、狭義の宗教のみならず、政治や国家論においても、価値論においても、当然扱われるべき視点である。

「命限りあり惜しむべからず。遂に願ふべきは仏国なり」とは日蓮の言葉である。論語では、子貢が孔子に政を問うた伝承に、「古より皆死有り、民信無くんば立たず」という。

モーセ五書には、これまた有名な句があり、古来ユダヤ教徒はこれを朝夕の信仰告白として今に至っている。『心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くして、汝の神である主を愛しなさい』と。魂とは命、力とは財産を意味する。命がけで、全財産を投げうってでも、613 誠を命ずる創造主の教えに徹して献身すべきであるというのである。これと同じ創造主でも、キリストの死と復活によって人類に救済をもたらした御方としての神を信仰するキリスト教においては、信徒自らが、キリストとともに十字架に死して復活することによって、執着する我は死んで、救済が達せられるとするものであろう。方法学において、極めて大きな違いがある。イスラームとは、アッラーへの絶対帰依の謂であるから、信徒の莫大なエネルギーがどの方向に向かうかは、注目の的となってしまうべきものである。

ただ、ユダヤ教にも、愚直なまでの律法実践以外の方法がある。経験上うすうすわかるのだが、タルムードの学習自体が宗教的命令の実践とされているものの、これもいやいややるのではなく、タルムードの学習には不思議な魅力があって、ある種の快感といえるもの、原典のテキストが法律的対論であるにもかかわらず、叙事詩のようなリズムと抑揚とを伴う恍惚とした没入感を与えてくれる。しかも、内容がわかればわかるほど、そうなる傾向にある。この魅力は、どこか捨てがたいものがある。

それと、ハシディズムの世界である。これは、神へと心を執着させることによって、人の心に邪念が起こらないようにする技を実践し、かつ理論化したユダヤ神秘主義の大衆運動であった。わたしは今、少しばかり取り憑かれているところである。もちろん、それは学術研究の対象としてである。

<死>のつくり方

竹内 整一

昨年6月に行われた「死の臨床と死生観」というシンポジウムにおいては、さまざまな問題が提起されました。あとで申し上げますように、柳田邦男氏と広井良典氏は、ともに<死の物語>の確立を訴え、森岡正博氏は、死、死後を論ずるに当たっての実感の必要性を、また若林一美氏は、死の悲しみの再評価をそれぞれ提言されました。くわしくは、4月発行のブックレット『死の臨床と死生観』をご覧くださいと思いますが、ここではそのなかでも、私にとってもっとも興味深かった、また今後さらに考えていくべきと思われた点を取り上げておきたいと思います。

柳田さんと広井さんは、ともに<死の物語>の確立の必要性を論じられたのですが、その中味は大きく異なります。柳田さんは、死を前にして自分の人生を完成・完結させることが大切だ、そうすることによって死の納得が可能になる、現代は一人ひとりが自分の<死の物語>をつくる時代だ、という意味での<死の物語>の必要性を、いっぽう広井さんは、現代日本には、死ねば無になるといったような死生観の空洞化現象が蔓延している、今われわれは、何らかの意味で「たましいの帰っていく場所」としての死を、それぞれの仕方で見出しつくてゆくことが大切だ、という意味での<死の物語(死生観)>の必要を説いていたからです。

広井さんのいう「死の物語」は、死また死後をふくめての「死の物語」のことでして、柳田さんのいう「死の物語」は、死を前にして自分の人生をそこへと完結させる、その意味での「死の物語」ということです。このふたつの「死の物語」は、それぞれそれ自体としても十分に問われるべき問題だと思いますが、さらには、このふたつがどう関係するのか、ということが問題になってまいります。つまり、死とその後という「死の物語」と、死へと完結させるという「死の物語」とはどう繋がるのか、繋がらないのか、という問題です。少し強くとれば、柳田さんは、広井さんのいうように、死ねば無になると思っているのか、こちらの人生をまとめ上げると言っているのか、という問いにもなります。

シンポジウムでは、以上のことを、いささか唐突ですが、『平家物語』の最後に近い部分、平家の総大将・平知盛の、こういう発言を引いて伺いました。



見るべき程の事は見つ、今は自害せん。

問題は、知盛の、この「見るべき程の事は見つ」とは何を見たのか、ということです。ひとつの解釈は、平家の総大将として、一門の行末・運命というものを全部見た・見きわめたということです。やるべきことはやった、これでよし、といった、こちらの世界での完結を見たという理解です。これが普通の解釈ですが、もうひとつあります。それは、全部見た、見きわめたということは、見切るということでもあり、此岸を見切った、見限ったということであると、ゆえにここには、彼岸、あちらの世界を見た、あちら側への視線、希求が込められているという解釈です。こういうふたつの解釈が、ふたつながらにありうるというところに、この「知盛最後」の面白さがあるのだらうと思います。

こうした事例なども踏まえて、とくに柳田さんに、先のことを訊いたわけです。

柳田さんは、これに対して直接に答えられたのではないのですが、佐野洋子さんの絵本『100万回生きたねこ』のお話をされました。自分は小さい時から「色即是空」という言葉がずっと気になって、その言葉に捕らえられてきた、と。色ある、形あるものはすべて空しくなる、という言葉ですが、それがこの『100万回生きたねこ』で、ある納得が得られた、というんですね。

ある雄猫がいて、その猫は100万回死んで100万回生き返ってきた、ところが最後、ある雌猫を愛して、そしていっぱいの子供をつくって、でもその雌猫に死なれて、泣きに泣いて泣きあかして結局彼も死んでしまう、が、今度は生き返らなかった、と。絵本は最後、アカマンマの揺れる、きれいな野原の場面で終わっている。そしてその最後の場面が、自分にとっての「色即是空」のイメージに重なって捉えられた、というような言い方をされました。

以下、私の勝手な解説をふくめての話ですが、つまりいってみれば、その雄猫は、こちらでの生をやっぱり完結したということなのだらうと思います。だからもうふたたび、生き返らなかったということなのだらうと思いますが、その完結のあり方が、そのままどこかしら、次の世界にも繋がっているというようなことがあるのではないかと、ということです。つまり、アカマンマの揺れるきれいな野原とは、そこがこちら側の完成の場であると同時に、すでにあちら側への一歩がそこで踏み出されているというような場でもあったのではないかと、ということです。

明日、地球が終わりであっても、私はリンゴの木を植える。

柳田さんのご著書のなかで引かれていたルターの言葉です。これもまた、自分や地球が終わりになろうとも、こちらの世界の営みを続け、果たす、ということであるし、それはそのままルターにとっては、あちら側の世界につながる営みでもあったということもできるのではないかと、いうことです。

ある次元での完結というのは、すでにその次元を超えている、という発想があります。こちら側の完結というのは、もうあちら側への第一歩であり、あちら側がどういう世界であるかはわからないままに、あちら側に繋がっているのだ、ということなのかも知れません。

「明日の事を思ひ煩ふなかれ。一日の苦勞は一日にて足れり。」という聖書言葉を受けて、「今日を生きてみると、明日はもう一つの光がさすんぢやないか。」と思えたところに、正宗白鳥の臨終帰依の「アーメン」があったように思います。

ご存知のように「色即是空」とは、『般若心経』の有名な言葉ですが、ここでは、それが「色即是空 空即是色」とひっくり返され繋がれて説かれています。これをどう生きた現代の言葉で考えるかが大事なのですが、浄土真宗のお坊さんであった金子大栄は、

花びらは散る。
花は散らない。

と、簡単に言い換えています。ものとしての「花びらは散る」が、生きているということ、生きたということ自体は、どうあっても「散らない」、消えないということです。

こうした理解が以上の議論にどうかみ合うのか、またそこを、森岡さんがいわれたように、どこまで実感として語る事ができるのかが問題になりますし、さらにそこには、若林さんの出された悲しみという感情のもっている可能性が関わってくるのですが、それは今後の課題です。以上のような問題が確認できただけでも、シンポジウムの意義があったと思っていますが、いずれも今後さらに考えて続けていくべき問題だと思っています。

(5月28日、文1番教室「五月祭」公開講座より採録)

書評 谷川健一著『神に追われて』(2000、新潮社)

嶋内 博愛

民俗学者・谷川健一が、日本最南部の島々における神々への信仰について描いたのが本書である。章立ては5章。小説の形式をとってはいるものの、その背後には、数十年に及ぶ現地調査の蓄積と、著者ならではの深遠にして荘重な構想力がある。それゆえ、表現は生々しく、記述は厚い。まず導入部の「魂の危機」では、一見荒唐無稽とも思える南島のユタたちの宗教体験が、福音書にあるイエスの体験事例と比較され、これにより事例自体の相対化がはかれる。続く「南島の巫女への道」および「洞窟の女神」では、本書の主演ともいえる宮古島出身の根間カナとその弟・鷹彦が、ありふれた日常生活を送っていたところ、神の呼び声に導かれ、「神ダーリ」といわれる過酷な巫病の末に、神の声を聞き分けるカンカカリヤとなるまでの召命・入巫過程が描かれる。沖縄が本土に復帰する1970年代のことである。そして後半部の「悪霊と戦う少女」および「神の森」では、1990年代へと時は移り、カナと鷹彦が熟練したユタとなって登場する。悪霊に

憑かれたという少女ルチア 興味深いことに、ルチアとは光の女神の名前であり、たとえばフランス・アルザス北部のクリスマスに蝋燭を持って家々を訪う白衣の少女をも想起させる

が、カナに出会い、心の平穩を得るまでの遍歴の聞き役となったり、宮古島の隣島・池間島に出自をもつ赤木トキが、島の宗教祭祀を司るようになるまでを見守ったりする。

ここに登場するカンカカリヤたちは、決して自ら求めて神の道に入ったのではない。彼らは、「神に追われ、逃げおおせることが出来なくなった時に、神に自分の魂をゆずり渡」した者たちなのである。彼らが神について語る言葉は、あまりにも悲痛だ。はたして人を執拗に追いかける「神」とはいったい何者なのか。カナのところに現れた神は、『風土記』の祖神のようなみすばらしい風体をした姿から、白ひげの老人へと変身する。カナの弟・鷹彦の前にも、魅惑的な女神が現れる。悪霊と戦う少女ルチアの神もまた、カナの神と同様、白ひげの老人だった。祭祀を司る

ようになるトキの場合は、島の信仰の中心である御嶽^{うたき}の神に導かれている。神は誰の目にも見えるわけではない。それゆえ、神を感じることをできない者にとっては、「神はいない」ことにもなり得る。じっさい、カナ自身も、夫が神をみる力をもたなかったことから、結婚に2度失敗してもいるのだ。つまるところ、追いたてる神についての彼らの語りを真実として受け入れるかどうかは、受け手に委ねられているのである。

民俗学や文化人類学の分析概念を用いてこうした対象を描く場合、いうまでもなく社会的な側面からのアプローチが不可欠となる。そのため、そこから立ち上がる像は、往々にして、さながら広角レンズを使って写した写真のごとく、細部へのこだわりというよりはむしろ全体への気配りが感じられるものとなる。しかし谷川がここでこだわったのは、あくまでもズームレンズの向こう側に立ち現れるカンカカリヤたち、民俗宗教に関わる者の、無骨なまでに実直な生きざまといえる。彼の視線には、精神科医が患者（として訪れる人々）に向けるまなざしにも似た鋭さが備わっているが、両者の間には決定的な違いがあるように思える。それは、視線の先にいる人々が属する、南島社会に対しての<理解>あるいは当事者性ではないだろうか。現代医療の枠組みでは、憑依など宗教的影響を濃厚に帯びた具体的事例に対峙する際も、治療者は「疾患」としてそれと向き合うことになる。それに対し、民俗学者としての谷川の目は、まっすぐに沖縄というコンテクストにおける社会的現実として対象を見据える。見据えながら、狂気と正気とのあえかなる皮膜を追う。そのかぎりにおいて、彼が描き出したユタたちの宗教体験は、臨床の知が示す疾病からの回復過程とは明らかに一線を画す生の営みとして、読むものに迫ってくるのである。

コンテクストが変われば、「精神疾患患者」という社会的弱者の範疇に押し込められてしまうかもしれない人々の声の背後に、神の紛れもない顕現を見、彼らを神の子として大切にするという南島の人々。こうした精神性を育むゆりかごとしての南島の森。ことほどさように、そこには時間の慣性を超えてなお神を受け入れる素地が宿っているというのだ。景観に裏打ちされたうえでの「病い」へのまなざしもいえよう。だとすれば、こうした谷川のまなざしの行方に、すぐれて南方的な死生観の一端を、かいま見ることができるのではないだろうか。



公開シンポジウム「儒教における生と死」報告

小島 毅

4月23日(土)午後1時から5時半まで、医学部教育研究棟14階にある鉄門講堂を会場として、公開シンポジウム「儒教における生と死」が開催された。この企画は、COE特任教授として杜維明氏を招聘するにあたっての主要行事として位置づけられたもので、杜氏の基調講演を中心に儒教における死生観の問題を検討する試みとして準備された。会場には百名を越す来会者があった。なお、杜氏はこの日は英語を用い、同時通訳も英語と日本語との間で行われた。

まず、COEの拠点リーダー島蘭進氏が挨拶を行い、杜氏を迎えて東アジアの



死生観について意見交換できることの意義を説いた。つづいて杜氏が「An “Anthropocosmic” Perspective on Creativity」と題する基調講演を行った。Anthropocosmicとは、中国古典に見える天と人との相関関係から世界を捉える見方を英語で表現したものである。事前に用意されたペーパーでは、儒教における生の思想がもっぱら扱われていたが、口頭報告においては、これに限定されることなく、儒教における生命観の問題が短い時間のなかで幅広く語られた。次に、小島毅が「死を見据える 儒教、武士道、行の哲学」と題して、日本の武士道が儒教と融合していくなかで、ある価値のために自分の命を投げ出すことをどのように理論化していったかを報告した。杜氏と同格の基調講演扱いになっているが、杜氏のような現代新儒家が生まれる前史・背景を思想的に紹介する趣旨であった。

ここで休憩をはさみ、2人のコメンテーターが登壇した。まず、桜美林大学の坂部恵氏(東大名誉教授)から、杜氏の言うAnthropocosmicな哲学は近代以前の西洋にも見られ、むしろそれを失っていったところに近代の特質が存すること、また、小島が指摘した明治以降の西洋思想受容の問題点もこれと関わるのが指摘された。次に、学習院大学の馬淵昌也氏から、杜・小島両名の報告では触れられなかった儒教と死に関する問題について、たとえば民衆が信仰する道教などの関わりや、死者への祭祀の習俗の捉え方が今後の課題として示された。

その後、4人の報告者が壇上に並び、渡辺浩氏(法学政治学研究科教授、前副学長)の司会のもと、相互の見解に対する意見表明や、来会者からの質問への応答がなされた。なかでも、やはり本COEの主たるテーマの1つである生命倫理との関わりについて、儒教の伝統的な身体観の問題、あるいは将来へ向けての儒教の展望が語られた。

報告者があらかじめ定められた持ち時間を厳守し、また、司会の渡辺氏による的確な進行やまとめ方、英語ではわかりにくい語彙を簡単に補足解説するなどの心配りによって、儒教についての専門的知識を持たない一般来会者にとっても、わかりやすく気持ちよいシンポジウムとなったものと信ずる。関係各位の尽力に謝意を表したい。

杜維明教授隨行記

小島 毅

杜維明教授は、以上個別に報告した諸講演（4日＝駒場キャンパス、7日＝筑波大学東京キャンパス、14日＝本郷キャンパス文学部、23日＝本郷キャンパス医学部鉄門講堂）のほかにも、滞在期間中、精力的に中国研究関係者と会って交流を深めた。以下、その一部を簡単に紹介する。

4月2日（土）には、東京大学名誉教授溝口雄三氏が主宰する宋明研究会に出席した。この会は武蔵大学を会場として毎月一回定例で行われているもので、『朱子語類』を翻訳する輪読会である。当日、杜氏は日本語の訳語確定をめぐる議論を傍聴したあと、溝口氏の求めで、当日話題になっていた「太極」概念に関する氏の見解を披瀝した。

5日（火）は二十四節季の清明、中国人が墓参をする日であった。そこで、小島が随行して大塚先儒墓地を訪問した。この墓地は護国寺の脇にあって、江戸時代の儒者たちのうち、仏式で葬られるのを潔しとしなかった人たちとその一族の墓がある。杜氏は日本儒学史にも詳しく、馴染みの名をいくつも墓石に見付けて感慨深げであった。この日は溝口雄三氏と昼食を共にして懇談した。

6日（水）は朝一番で駒込の六義園に行き、荻生徂徠が將軍徳川綱吉や老中柳沢吉保相手に中国語で儒学を講じた跡を訪ねた。それから、近くの東洋文庫を訪問、斯波義信理事長じきじきの案内で書庫を見学した。杜氏が所長を務めるハーバード＝イェンチン研究所はハーバード大学における東アジア諸言語専門図書館の機能も果たしており、杜氏はそうした面での実務的な関心を強く示して斯波氏に質問していた。

7日（木）は筑波大学での講演の前に、午前中は東方学会を訪問、戸川芳郎理事長（東京大学名誉教授、元文学部長）や事務局の方々と、日米両国のアジア研究者の交流のことなどを懇談した。

また、14日（木）も東大での講演の前に、午前中に早稲田大学を訪問、文学学術院長の土田健次郎氏と会談した。土田氏は朱子学を中心に儒学思想を専攻する研究者であるが、当日はちょうど公表されたばかりの早稲田大学の新学部構想の話題が中心となり、ともに大学の要職にある二人の間で、短い時間ながら密度の濃い会話がなされた。

さらに、18日（月）には、午前中、二松学舎大学を訪問し、戸川氏ほか同大学関係者の方々に米国における中国研究の現状紹介を行った。午後4時から、東大に戻って東洋文化研究所第一会議室において Multiple Modernities Implications of the Rise of "Confucian" East Asia と題する講演を行い、約30名の参加者があった。

このほかにも、他の大学の方々のお世話でいくつかの会合が持たれたが、紙数の制約もあり、省略させていただく。このように、杜氏は非常に過密なスケジュールをこなし、特任教授としての務めを充分果たして、4月25日（月）に米国に帰国された。

アン・モンガヴァン氏講演研究会「命のギフトと命のリレー」報告

島 進

2005年5月9日(月)午後5時より7時まで、医学部図書館333号室において、インディアナ大学宗教学科助教授のアン・モンガヴァン氏による講演「命のギフトと命のリレー 臓器提供のレトリックが意味するもの」と研究討議の集いが持たれた。東京医学会との共催であり、医学・健康科学関係者が多数参加する機会となった。モンガヴァン氏はアメリカ合衆国で臓器移植に関わる公共政策の現場に関わってきた経験をもっているが、昨年秋より日本の臓器移植をめぐる象徴的思考をアメリカのそれと比較すべく調査研究のために日本に滞在し、あわせて本C O E「死生学の構築」のさまざまなプログラムに関わってきた。この度の講演は、日本での調査の結果を踏まえ、日米両国の臓器移植をめぐるレトリックを比較しながらその特徴を明らかにしようとするものだった。



アメリカ合衆国では、生体間臓器移植には大きな倫理的問題があると考えられているが、脳死体からの臓器移植には倫理的問題がないと理解されている。ところが日本人の認識はこの対極に位置する。このような違いが生ずる理由につき、日本のインダビュイーは多くの啓発的な発言をしてくれたという。人間が人間であるゆえんを「頭(=脳)」の機能に見るか、「心(=心臓)」の機能に見るかの相違は明白なようだが、それは孤立した箱に入った「ギフト」の授受のイメージに対して、人と人が手をつなぐ温かいつながりをイメージさせる「リレー」のイメージとも関連している。

アメリカで脳死臓器移植が好まれる際には、「犠牲による再生」のイメージが関わっており、知らず知らずのうちにキリスト教的なレトリックが影響を及ぼしているが、それはあまり自覚されておらず、そのためにドナーとなろうとしない人びとに差別的な眼差しを注ぐことにもなる。また、多元性を好むはずの文化伝統でありながら、「脳死=死」という一元的な立場の問題性が自覚されていない。他方、日本では生体間移植が近い者の中でいつしか善意の強要の意味をもってしまうことがほとんど認識されていない。関係やつながりを重視する文化規範の問題点が十分に自覚されていない。これはこの問題について、フェミニズム的な立場からの考察が目立たないことと関わりがあるかもしれない。

モンガヴァン氏は生命倫理に対する宗教学的なアプローチの特徴は、文化が含みもっている象徴的な思考に注目し、その倫理的な意味を明らかにしていくことであるとし、日米両国の臓器移植の比較研究においてそうしたアプローチの有効性が示されつつあると論じた。これは従来の「死生学」を拡充しながら、人類文化の多様性の中に死生学を位置づけ直そうとする本C O Eの目標と一致するところがある論点と思われる。医学・健康科学関係者、宗教関係者など現場的、臨床的な関心をもつ研究者の質問があいつぎ、豊かな討議が行われたが、現場との相互交渉を重視するモンガヴァン氏の方法論や研究スタイルも、また、人文学の新たな展開の可能性を示すものと言えよう。

Dr. Neal Krause 講演研究会 “ Religion, Aging, and Health (宗教、エイジング、健康の関連)” 報告

金児恵・秋山弘子

去る 2005 年 5 月 31 日（金）午後 5 時より、東京大学文学部文学部法文 2 号館 1 番大教室にて Neal Krause 博士講演研究会が開催された。Krause 氏はミシガン大学公衆衛生学部教授であり、同大学老年学研究所の研究教授も兼任されている。氏は長年にわたって宗教と健康との関わりを研究してこられた第一人者である。今回の講演研究会は「宗教、エイジング、健康の関連（Religion, Aging, and Health）」と題し、特に宗教的志向が高くなる高齢者において、宗教行動や信仰心が健康とどのような関連があるのかを論じるものであった。平日の開催にもかかわらず、公衆衛生学、医学、福祉、心理学、宗教学、老年学など多岐に渡る分野からおよそ 80 名もの聴衆が参加し、その関心の高さが伺えた。



Krause 氏は、まず、特に高齢者にとって宗教が重要な意味を持つことを、精神医学者として名高いエリクソンの発達理論の観点から論じた上で、宗教と健康との関連に関するアメリカでの実証研究を紹介しながら、これまでの氏の研究成果を発表した。エリクソンは当初、人の人生最後の課題は、自らの人生を振り返り、過去の希望と現実との折り合いを付けること（統合）と考えた。しかし彼は晩年、「統合」の代わりに「信仰」という用語を用いるようになった。人は年を取るに連れて、差し迫る死の意識が高まり、精神的なふるさと(spiritual home)へ思いを巡らせるようになる。そうした死にまつわる問に対する答えを与えてくれるからこそ、宗教は高齢者にとって重要になるのだという。そしてクラウス氏は、定期的な教会への出席が死亡率を低めるとの知見を引き、そうした宗教的な関与のどの側面が鍵となっているのかを突き止める必要があると指摘した。氏は複数のインタビュー調査や社会調査から、宗教の主要な要素を特定したが、本講演研究会では特に「神の媒介による統制感」、「教会でのソーシャル・サポート」、「宗教に対する疑念」の3要因について論じた。

人生で生じる出来事は、運や他者などの外部の力ではなく自分の力によって決まる、という感覚を持つことは一般に人の健康と結びついているが、こうした統制感加齢に伴い低下する。そのとき、信仰を持つことで、神の力をかりて人生における諸問題を乗り越え、目標を達成することができるという「神の媒介による統制感」が得られる。調査の結果、こうした感覚が強い人ほど、精神的健康が高いことが明らかになった。一方、氏は、神道か仏教を信仰する人が多い日本では、神道と仏教の重要な側面である「先祖への祈り」の中に家族の健康や守護の祈願が含まれていることに注目し、そのような「祖先崇拜」にも「神の媒介による統制感」と同様の効果があるのでは、と指摘した。

また、教会の会衆から悩みを聞いてもらったり健康を気遣ってもらったりといった情緒的なサポートを多く受けている人は、経済的な困難が健康に及ぼす負の影響が緩和されることがアメリ

力のデータから示された。氏は、日本では神社やお寺で対人的なネットワークを広げているようには見受けられないが、神道や仏教には他者を受け入れ、困っている人を助けるようにとの教えがあることから、信仰心の高い人々ほど家族や友人とより親しい人間関係を築いていると考えた。実際、信仰心が高い日本人男性は、情緒的なサポートを他者に多く与え、精神的健康が高いことを全国高齢者調査のデータから明らかにした。

さらに、宗教に対して疑念を持っているほど心理的な苦痛が生じるが、そうした傾向は特に低学歴の人に見られることもデータから明らかになったという。

最後に、太古の昔から形は違えどあらゆる文化に存在する宗教には何らかの機能があるはずであり、その一つが高齢者の身体的・精神的健康の向上なのかも知れないと論じた。

加齢や死は全ての人間にとって避けられない問題である。身体的機能や人間関係など、様々な喪失を経験する高齢者の健康を宗教あるいはスピリチュアリティの面から検証する実証研究は、我々個人にとっても、社会全体にとっても重要であることを学ぶことができたという点で、本講演研究会は非常に有意義であった。

なお、講演後、クラウド氏を囲む懇親会が開かれ、氏と参加者との議論のみならず異分野の参加者同士の交流の場としても大いに盛り上りをみせたことを付け加えておきたい。

今後の予定

シンポジウム「ケアと自己決定」

熊野 純彦

| | |
|---------|--|
| 日時 | 2005年11月26日(土) 13:00 - 17:00 |
| 会場 | 東京大学 医学部2号館 本館 大講堂 |
| 提供者 | 立岩真也(「障害者運動」の視点から) 川本隆史(「老人介護」論の視点から) 清水哲郎(「終末期医療」の視点から) |
| コメンテーター | 上野千鶴子、鷲田清一 |

今日「自己決定」ということばはさまざまな場面で使われるようになっており、それにとともに論点も多岐にわたっている。医療の frontline がいわゆる「感染症」であった時代には、治療の形態はもっぱら「隔離」であり、治療方法は当事者による選択の余地を残さないものであった。これに対して、「隔離」政策そのものが見なおされ、同時にまた、医療 frontline が「生活習慣病」へと推移するとともに、当事者について、長期にわたる QOL が問題とされる一方、いわゆる「自己決定」が論点として浮上してきたといつてよい。習慣病の当事者は、おおむね「判断能力をもつ成人」であり、また感染症とはことなり、その決定は「他者危害の原則」を侵さないものであると見なされたからである。

医療 frontline のこの推移は、古典的なバイオエシックスの成立とかがわっている。その結果、古典

的な生命倫理における「自己決定」の問題は、大まかにいえばいわゆるパターンリズム批判とも関連して、「強い」主体による自己決定を原型として論じられてきたように思われる。自己決定はいわば、たまたま「少数者」（「成人」病患者）に転じた、「多数者」（「健常者」）の問題としてとらえられてきたのである。

けれども、自己決定の問題は、むしろ、伝統的な枠組みのなかでは「少数者」であり、「弱者」であると考えられてきた当事者にとってこそ、より深刻なものとなりうる。たとえばいわゆる「障害者」は、長くその自己決定権を部分的に、あるいは全面的に否認されてきた。今日でもなお「高齢者」の自己決定は、いくつもの要因によって制限されている。また、いわゆる終末期医療にあっても、当事者の判断能力に疑義がもたれるかぎり、自己決定の原則は一定の制約のもとに置かれているのが実情である。

「障害者」や「高齢者」、「終末期医療」の当事者に視点を据えるとき、自己決定をめぐる問題と、いわゆる「ケア」にかかわる問題とが切りはなしがたいものであることが、あらためて浮上する。そこで問題となる「当事者」たちは、一方では広義のケアを必要とするひとびとであり、他方、ケアとは自己決定を支えるケアでなければならないと考えられるからである。

そのように整理してしまえば、論点はたんに、「弱い」主体をめぐる問題、「少数者」にかかわる問題であるかにも見える。とはいえ、ひとはだれも無力で、他者のケアを必要とする存在としてまず生まれ、やがては年老いて、それぞれに死を迎える。その過程のなかで、あるいは疾病により、あるいは事故によって、身体が制限されることになる可能性に対しても、ひとはほぼ平等に開かれている。論点は、だから、だれにとっても、じぶんが当事者となりうることがかかわっているのである。

シンポジウムでは、「障害者運動」、「老人介護」、「終末期医療」のそれぞれの現場のただなか、あるいはその近傍で、問題を提起しつづけてきた論者を迎え、簡単な問題提起をしていただき、さらに、広い視野をもつコメンテーター二名によるコメントを承けて、フロアからの発言をもとめ、問題を考えつづけてゆくためのヒントを共有したい。

シンポジウム自体は事前申し込み等の参加要件をとくにもうけず、一般に開放する。主要な聴衆としては、現実的／可能的な当事者であるひとびと、医療従事者、福祉関係者、問題に関心のある学生、教員を想定している。

詳しくは、ホームページ (<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/shiseigaku>) でご確認下さい。

事業推進担当者

(拠点リーダー)

島園 進 <宗教学>

竹内 整一 <倫理学・拠点リーダー代理>

(第一部会：死生学の実践哲学的再検討)

熊野 純彦 <倫理学・世話人>

一ノ瀬 正樹 <哲学・世話人>

松永 澄夫 <哲学>

関根 清三 <倫理学>

榊原 哲也 <哲学>

(第二部会：生と死の形象と死生観)

小佐野 重利 <美術史・世話人>

木下 直之 <文化資源学>

大貫 静夫 <考古学>

(第三部会：死生観をめぐる文明と価値観)

下田 正弘 <インド哲学仏教学・世話人>

多田 一臣 <国文学>

市川 裕 <宗教学>

池澤 優 <宗教学>

(第四部会：生命活動の発現としての人間観の検討)

武川 正吾 <社会学・世話人>

横澤 一彦 <心理学>

立花 政夫 <心理学>

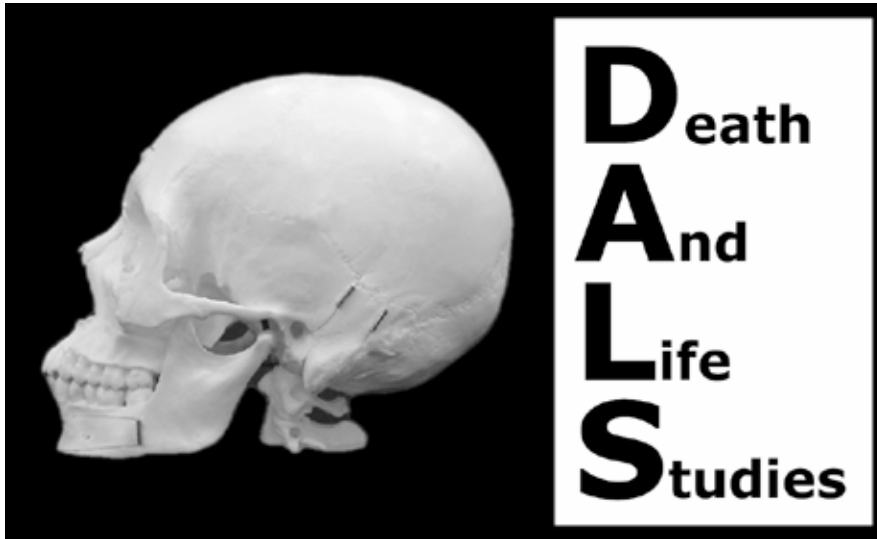
林 徹 <言語学>

赤林 朗 <医療倫理学>

甲斐 一郎 <健康科学>

西平 直 <教育学>

秋山 弘子 <社会心理学>



「DALIS ニュースレター」
第 10 号
平成 17 年 7 月 1 日発行
東京大学大学院人文社会系研究科
21 世紀 COE “生命の文化・価値をめぐる「死生学」の構築”
責任者 島 蘭 進
TEL & FAX 03-5841-3736